

# 第16回「文芸思潮」エッセイ賞発表

第16回  
文芸思潮  
エッセイ賞

二〇二二年度第16回「文芸思潮」エッセイ賞は、三四六篇という、昨年よりも七〇篇ほど多い熱い御応募をいただきました。今回も十代から九十代までの広い世代と同時に、地域的にもヨーロッパ、アメリカ、アジア、太平洋地域などから広く寄せられました。それぞれの貴重な体験だけでなく、歴史として重要な記録や、社会への鋭い批評や問いかけも多く寄せられ、現代に生きる人々の姿が反映された、レベルの高い内容でした。

例年の通り、まず選考委員会選担当による第三次までの予選選考が行なわれ、その中からさらに最終選考作品が選ばれ、最後に三神弘、水木亮、都築隆広、五十嵐勉四人の選考委員によって七月三十一日山梨県甲府市において最終選考会が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀作および優秀作を発表させていただきますが、以後奨励賞作品も、極力「文芸思潮」誌上に掲載させていただき予定です。御期待ください。

また明年も同じ要領で募集いたします。どうぞ奮って力作エッセイを御応募ください。お待ちしております。

## 「文芸思潮」エッセイ賞

### 最優秀賞

「久保木おばあさんの  
最初で最後の授業」

椎名加奈子 (千葉県千葉市)

### 「校庭のエメラルド」

七森侑佳 (東京都杉並区)

### 優秀賞

「コロナ禍 仲間たちへの想い」

金田 薫 (神奈川県川崎市)

「母の電話帳」 斉藤はな絵 (北海道岩内郡)

「ドルジェよ、生きているか!？」

西島雅博 (福島県いわき市)

「母と雀」 丘田ミイ子 (東京都杉並区)

「ウイグル人の証言をきいて」

山田まさ子 (大阪府堺市北区)

「翡翠」 菊見洋介 (東京都西東京市)

「フタホシコオロギ」

沓掛理美 (東京都豊島区)

「途上にて」 西村徹也 (長崎県大村市)

「元安川の石」 田中美晴 (大阪府豊中市)

「仮の宿」 高田智子 (滋賀県東近江市)

### 奨励賞

「新聞、見たよ!」 石田真一 (大阪府堺市)

「桐タンス」 近藤幹夫 (福井県勝山市)

「ひきこも」もの愛しき軌跡」 音葉紬 (長野県上田市)

「店長」 植田郁子 (京都府京都市)

「父の温もり」 武中 彩 (福岡県北九州市)

「ボイラーメンテ」 anehako (東京都世田谷区)

「昭和からののがき」 安部としき (福岡県福岡市)

「記憶を失った君からもらった異常な愛情」

佐藤真規 (埼玉県越谷市)

「夕火」 森 瑞帆 (京都府京都市)

「夜のしじまの中で」 熊谷和代 (徳島県徳島市)

「ママ友」 朝比奈優 (東京都品川区)

「より添い猫と歩む明日」 春木美子 (静岡県三島市)

「幸い日和」 菅 幸世 (栃木県宇都宮市)

「ちいさな認定証」 渡辺 勝 (長野県上田市)

「老いを生きる術」 小池光一 (東京都渋谷区)

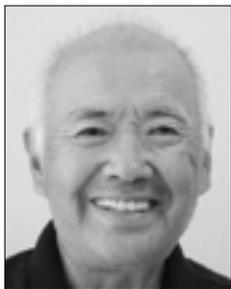
「ゴン」 馬込太郎 (静岡県浜松市)

「敗者復活戦」 小笠原敏夫 (山形県酒田市)

「母の書道」 池田茂夫 (神奈川県横浜)

(次ページに続く)

選評



みずき りょう

作家・劇作家・演出家  
1942 北朝鮮生まれ  
99 小説「祝祭」で第16回織田作之助賞受賞  
2006 小説「お見合いツアー」で第49回農民文学賞受賞  
戯曲も多数ある

コロナ禍で生きる人々の想い

水木亮

コロナの問題は二年連続で続き、終わりが見えない。この厳しい感染状況のなかでオリンピックが強行された。利権に絡む政府の姿は、原爆が落とされるまで戦争の終結にためらった先の太平洋戦争の姿と重なる。何よりオリンピックが始まれば、国民はそれに夢中になることを読んでいる為政者の目論見が悔しい。歴史を学ばない日本は同じことをまた繰り返すのではないか。

この状況のなかで応募数は増えている。私は個人的にエッセイ教室を開いているが、やってくるのはほとんど前に「文芸思潮」に連載した「水木亮のワンポイントエッセイ」を改定したものである。興味のある方は是非読んでいただきたい。

今回全般的に作品のレベルは上がっていると思う。優秀賞も数が多いし特に奨励賞の数が多くなっている。ただし、自分だけがこれは面白いと思いついてる作品もないわけではない。自分の関心やこだわり、その面白さを読む人に伝える、わかってもらう努力が肝心だ。

最優秀賞に選ばれた七森侑佳さんの「校庭のエメラルド」は、小学生の友達への観察、その視点がとてもユニークで興味がひかれる。事情がある少女が、作り話の中に自分の存在、生きる価値を考える願望は、どん底の環境を生きている人間の知恵である。土のなかにエメラルドが埋まっていると信じようとする、小学六年生の少女の姿が悲しい。これを共有する筆者の目が良い。ここには生きてゆく上で、どうしても小説やドラマを欲する人間の原点があると思う。優秀賞もなかなかの作品が多かった。心に残るいくつかの作品をあげてみたい。

沓掛理美さんの「フタホシコオロギ」は、飼育するヤモリの主食のコオロギについて書いた。死んでいくコオロギを観察し、その姿から日ごろ悩んでいる「もう一人の私」の姿を見つけた。コオロギがやがて人類の星になるかもしれない研究とあいまって、自分の未来にも希望を重ねて行

奨励賞

「聖山に登るべからず」 森崎律子 (大阪府大阪市)  
「祖父と私と新聞と」 藤田陽子 (神奈川県厚木市)  
「チェーホフの『おじいさん』のように」 牧康子 (東京都杉並区)

「2日間しか生きられなかった僕のおじいさんの名前」

Paody (東京都杉並区)

社会批評奨励賞

「現代の危機」

楽加生 (神奈川県横浜市)

「コンコルド効果」

佐藤陽平 (兵庫県神戸市)

「EじゃなくてもAじゃないか」

比戸圭 (愛媛県今治市)

ニアの女性ばかりだ。「文芸思潮」のエッセイコンクールで私が感じるのは、男性の応募者が多いことである。若い人はもちろん、退職後本格的に文章を書いてみたいと思う男性などとても良いことだと思ふ。よりよい精神的生活を目指す上での気持ちの整理や、脳の活性化など、文章表現活動は大いに役立つだろう。

私事だがこの度山梨日日新聞社から「エッセイを書く」という新書(定価1320円)が出版された。これは、くところに夢がある。

西村徹也さんの「途上にて」は散歩に出ると、死んだ愛犬が連れ添う話だ。その散歩では戦争中苦労した母親など、いろいろなことを思い出す。秀逸は、「人も動物も死んだ後も身近な者が覚えている限り生きていく。それを思い出す時、心に灯がともる」というくだりだ。ただタイトルは大事である。もっと工夫したい。

西島雅博さんの「ドルジェよ、生きてるか!」は、旅先で関わりのあったチベット僧とチベットについて書いた。チベットは中国により弾圧された。あらためてそのチベット僧の健在を願い、またダライ・ラマの存在の大きさを感じる。

山田まさ子さんの「ウイグル人の証言を聞いて」は、中国政府によるウイグル人の強制収容所を書いている。強制不妊が行われていて、中国政府のこの不当な弾圧は許せない。その問題を自分の見た、野良猫の親が人間の目を恐れながら、いかに子猫にご飯を与えるかの姿に託して書いた。さらに自分の親の体験も重ねて、とても迫力のある展開になって共感する。

田中美晴さんの「元安川の石」は美術教師の思い出から原爆の記憶を書いている。ここに記憶される馬の背中へのクロイドなど事実を、私たちは後世の若い世代に伝えたい。

高田智子さんの「仮の宿」はテント暮らしをする不思議

な老女とのめぐりあいを書いた。ここにも人生への想いがあり、読む者に伝わるものがある。

Paokyさんの「2日間しか生きられなかった僕のおじさんの名前」は名前について考えている。内容も悪くなく特に「名前を唱えると、心の中で光る」のくだりがよい。

丘田ミイ子さんの「母と雀」は雀に対する愛情にあふれていて心が癒される。

その他印象に残った作品を上げてみたい。熊谷和代さんの「夜のしじまの中で」は、日本歴史の汚点でもあるノモンハン事件を書いている。愚かな為政者による止まることを知らない戦火拡大。それは今回のオリンピックに見られるような、現代の為政者のやり方に通じる。

そこまで風刺が効くとエッセイが極めて身近なものになる。蒼 朔空さんの「個性」という言葉の魔力」は障害を生きる前向きな姿に好感を感じる。

植田郁子さんの「店長」は、「菓子はどんな時でも人の心を幸せにする力がある」と言った店長の現実の姿に、筆者の自分が添えなかつた悔恨が読ませる。

藤田陽子さんの「祖父と私と新聞」とは、筆者の孤独と波乱の人生の終末をよく書いている。

春木美子さんの「寄り添い猫と歩む明日」は、目の見えない捨て猫を医者に見せて助けた。そういう奇特な人もい

ることが、せちがらい世の中の救いでもある。

### 佳作

「逆風のかなたに聞く平和の水音」 平野靖雄

「わがシラバスの花ひらく」 本間 浩

「かつての家族」 浜 葉子

「失敗のバイのバイ」 駆け出し編集者頼末記

「ボランティア」 友 修一

「穴」 山田菜里

「終い湯の常連客と一見客」 中武 寛

「感謝の一品」 古城 正

「消息」 寒川靖子

「五万回斬られた男・福本清三への頌歌」 松宮信男

「未来へのパスポート」 森千恵子

「マホという猫のように」 甕左之助

「母の覚悟」 竹山元一

「ある夏の体験」 平本節子

「鳥津の残滓」 今井 満

「保護犬との出会い」 大谷重司

「太平洋を越えて」 早月春美

「戴冠詩人」 杏藤 伶

「左の蝶々と別れを告げた話」 辻村 明

「統合失調症と診断されて」 有澤かおり

「生と死」 松原泰子

菅幸世さんの「幸い日和」は、牧場で牛の世話をした体験を書いた。「牛も人間と同様牛見知りをする」が楽しい。結城孝子さんの「我が家のロン」は猫に寄せる愛情が読ませる。

朝比奈優さんの「ママ友」はあらためて正面から「ママ友」とは何かを追求していて面白かった。

馬込太郎さんの「ゴン」は、愛犬が「ウゲッ」と反応して亡くなる、その最期を書いて泣ける。

藤野杏奈さんの「祖父と私」は正直に祖父の気持ちを書いてすがすがしい。

大谷重司さんの「保護犬との出会い」も動物に寄せる思いがよい。

昨年書いたが「生きていて癒やされる、生きていてほっとする」。現在人々はそういうものをエッセイに求めているように思える。コロナのこの厳しい状況にあつて、書くことは人の気持ちを整理し、いかに生きてゆくかをあらためて考えさせる。自分のかけがえのない人生を書くことで、読み手と共感し合えることは人間だけの喜びである。文学不毛とも言われる現代、人々にそんな味のある「文芸思潮」のエッセイコンクールであつて欲しいと願う。

「九か月間の友人」 和賀清流

「我が家のロン」 結城孝子

「ジャーマン・シエパードと私」 村松佐保

「先生と過ごした時間」 青地久恵

「南の島のムラサキシキブ」 末永卓幸

「百歳に乾杯」 木下富砂子

「母のクーパー計画」 仲田恵利花

「ぐうばあとぐうまあのこと」 茂木 彩

「サヌールの犬」 奈良 元

「朝の光が待てなくて」 オノカオル

「花の名前」 中牟田智子

「二階から目薬」 天城囀一

「そんな馬鹿なあ」 ペペもんちーの

「怪人二十面相と鉄人8号」 大幸信明

「お母さんと呼ばれた日」 小山 咲

「跳べ！ キキ！」 磯野 桜

「コロナ闘物語」 竹中水前

「受者の眺め」 中村郁恵

「千夜を超えて」 成就志朗

「瞬きのうらおもて」 本間直也

「古里の記憶」 龍島彊子

「祖父と私」 藤野杏奈

「『自点自服の茶』を楽しむ」 林 須磨

「二度目の中学校で学んだこと」 安納煮芋

「子育て終了日記」 冬野 星

「気まぐれな指先」 角 朋美



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ  
79「流謫の島」で群像  
新人長編小説賞受賞  
98「緑の手紙」で読売  
新聞・NTTプリンテック  
主催第1回インターネット  
芸新人賞最優秀賞受賞  
2002「鉄の光」で健友館  
文学賞受賞

## 豊漁で、レベルも高い

### 五十嵐 勉

第一六回文芸思潮エッセイ賞は三四六篇の作品が寄せられた。昨年は二七七篇なので約七〇篇の増加である。今年の特徴は、その応募数に比例して、レベル以上の作品が多く、豊漁だったことである。特に優秀賞、奨励賞、佳作の層が厚く、どれを残すべきか、どれを落とすべきか、ひじょうに迷ったのが正直なところだった。最終候補の作品数も例年の一・二倍あり、どれが奨励賞になってもおかしくない高水準の選考となった。五點法で、三點以上が奨励賞に値するものと、ひとまずの基準が決められており、四人の選考委員の合計が一二点以上になれば、例年なら奨励賞になる。しかし今年は一二点以上が六〇人に上った。やむを

かなりの数が寄せられ、時代は新しい戦いの中にあることも痛感させられた。

最優秀賞は今年も意見が割れ、評価が分裂したが、最終的に「久保木おばあさんの最初で最後の授業」と「校庭のエメラルド」に決まった。

椎名加奈子氏の「久保木おばあさんの最初で最後の授業」は、少女期、上の学校へ行けなかった老人の晩年の学習と、周囲の温かな配慮による憧れの実現の話である。後半、そのお礼にまもなく失明するという眼の病を押しして作った刺繍の鍋つかみと巾着袋を送ってきたエピソードがさらに胸を打つ。平明な文章の中に綴られた貴重な体験は残しておくべき重みを持っていた。

七森侑佳氏の「校庭のエメラルド」は不遇な家庭での抑圧を美しい嘘をつくことで逃れている虚構への逃避を描いた作品で、水木選考員が特に強くこれを推した。私は当初、横書きであったり、「嘘をつく」ことへ逃げる姿勢を美化していたりする点など評価できなかったが、これを生きる「切なさ」に昇華しているという捉え方に重点を置くならば、妥協してもいいと判断した。ある意味では、「久保木おばあさんの最初で最後の授業」のちょうど正反対に位置する作品である。「嘘をつく」ことには、虚構への逃避というプラスの面もあるが、社会的には繋がり失っていくマイナスの面も大きく、この少女が将来成長して独力で社

### 佳作

#### 社会批評

- 「この頃の人生観」 入江太一
- 「初夏の窓の外」 村山政子
- 「さよなら、スリッパ」 末永直治
- 「鬱からの旅立ち」 安楽和人
- 「わからない本」 J・ナカノ
- 「ネヴァの流れの先に」 蒼井 和
- 「個性」という言葉の魔力」 蒼 朔空
- 「知ってたんだね」 亜佐子小母
- 「聞く力について考える」 すずらん
- 「四十年後の未来」 南條美起子
- 「ビジン語とクレオールそして外国語学習」 蔦 恭嗣

えず下半分は落とさなければならず、涙を飲んでもらわざるを得なかった。

全体的には数の上で高水準となったが、逆に今回数が少ないように感じたのは、じっくりとした味わい深い文章で潜んでいることも感じたし、また戦争の時代を振り返る文章も少なくなっていることも事実だった。時代の趨勢はいたしかたないと寂しく思う反面、コロナ禍での大きな体験も

会に入っていくとき、そこに生まれる軋轢や悲劇の方が遥かに重大な問題になっていくだろう。「嘘をつく」ことには、罪過が伴うからである。家庭の圧力から逃れるために

逆に学校での勉強に打ち込むという少女もいるかもしれない。前半の「美しい字」はそれを象徴しているとさえなくもない。筆者には、人間の「虚」を突く視点に寄りかか

ことなく、正面から受け止める姿勢を今後に期待したい。今回は時代を反映してコロナ禍を題材にした作品がいくつかあった。金田薫氏の「仲間たちへの想い」は、コロナウイルスの蔓延によって、一流巨大ホテルが閉鎖倒産に追い込まれる過程を描いて、時代の傷まじさが切々と伝わってくる。コロナウイルスはこのように巨大企業をも倒していく

のかという実感が迫ってくる。職を失った仲間へのいたわりと思いやりの上に、ホテルを維持する細かな心遣いと大きな労力が載せられて、ホテル業という大きな総体が血の通った生き物として立ち上がってくる。その面を見せてくれただけでも新鮮で、さらにそれがコロナウイルスの流行によって倒れていく壮大な悲劇を浮かび上がらせてくる点でも、出色だった。文章がもつと磨かれていて定着感が濃

ければ、最優秀賞として推したいとも思った作品である。エッセイ賞には第一回から脈々として動物を題材にしたいわゆる「動物もの」が息づいているが、今回は久々にその領域のものが多く、優れた作品がいくつも上に昇つてき

た。特に丘田ミイ子氏の「母と雀」は傷ついた雀を母が世話をし、それになつて命を通わせる話で、胸が熱くなった。最後は猫にやられるストーリーではあるが、その後の雀たちとの交流も心温まる命の通いがある。雀にも魂があることを感じさせる作品だった。

香掛理美氏の「フタホシコオロギ」も動物を題材にした作品だが、飼っているヤモリに食べさせるフタホシコオロギを育てているうちに、そのコオロギの生きる意思に気づかされ、「恐怖」や「知能」の存在を知る命の驚きに到達する物語である。この作品が優れているのは、さらにそこから自分も同じように「他者との関係性に悩まされながらがむしゃらに、繊細に生きていく」ことに気づかされる点である。それが普遍的なものとして世界に向けて大きく広がっていく覚醒が、素晴らしい。この覚醒は社会の荒波の中で世界へ向けて生き抜いていく強い力となっていくってほしい。

今回外国在住の方の作品は少なかったが、外国の問題に言及した作品がいくつかあり、その訴える力の強い二作品も優秀賞になった。西島雅博氏の「ドルジェよ、生きていくか?」と山田まさ子氏の「ウイグル人の証言を聞いて」である。西島氏の作品はチベット問題を扱っており、筆者の旅行中に親しくなった一人のチベット人を追懐することのうちに、生きた人間としての交わりの中から、重大な問

題の端に実感として触れている。このエッセイの意義深い点は、たとえ旅行者にすぎず、一度の交わりにすぎなくても、人間同士として触れ合ったそのことの中に直面する深刻な社会の問題を共有する力と可能性を示している点である。これからの世界は、通信の普遍化によって、ますます個人同士の思いを共有化する方向にあり、それがいつか世界を動かしていく希望の途上にある。この文章はそれを示してくれている。新鮮な力が宿っているように思った。

「ウイグル人の証言を聞いて」も、日本でたまたま行なわれた告発集会に参加してその強い印象を憤りとともに訴えている文章だが、ウイグルで行われている弾圧と圧政に人間同士として心を寄せ、真剣に受け止めているその共感の姿勢に、新たな可能性が感じられる。この共感には、「でも、何もできない」という傍観者の立場を超えて、新たな動きと行動に繋がっていく能動的なベクトルを生み出している。これもSNSなどを多用する今日の世界動勢の中では、将来への希望として大きな力に発展していく潜在性を秘めている。被害や弾圧を受けている当人に人間同士として寄り添い共感することが、新たな力となっていく、きわめて現代的な相を示唆しているところに新機軸が感じられた。付言すれば、チベットもウイグルも弾圧している主体は中国である。戦前・戦中と日本が大きく侵略して殺戮したその被害者であった中国が、今は逆に加害者の立場に立つ

## 入選

- 「血」 田中浩司
- 「人の悩み」 梅田慶一
- 「今がある―癌治療を終えて―」 田浦チサ子
- 「最後に見えるもの」 鎌田 誠
- 「母の死と魔の十一時」 倉沢辰子
- 「ゴビの恋模様」 菱川町子
- 「カメモシ」 まるもっこり
- 「脳裏にこびり付いている人」 佐高 源
- 「それぞれのたわごと」 ナガツチヨ
- 「雪解けの大地に咲く花のように」 たかぎちほ
- 「悠久の大地 ハルビン」 苑田有子
- 「声なき声」 ゴルビー長田
- 「死に神様」 宮尾美明
- 「大家と私」 菅野晴子
- 「桜」 内田智久
- 「野菜」 玉置順三
- 「私の好きな色」 早藤青里
- 「姉の様子」 柴田節子
- 「恩師の形見」 西尾 吉
- 「カメが生き延びたのは」 野宮健司
- 「時を超えた沈黙」 長井 潔

- 「イノシシ村から」 重松博昭
- 「ある年の春のこと」 すみれ
- 「寮生登山」 金田一淳
- 「昔……あの行進曲があった」 足達重子
- 「AI時代の『勘ピューター』」 内海健一
- 「大震災、癒えぬ心の傷」 佐藤義弘
- 「三つで千円」 もりのみどり
- 「四ヶ月の休職中に感じたこと」 みけにゃん
- 「18歳からみた警官」 ジョン・スミス
- 「書店とは」 高倉麻耶
- 「人生百年というけれど」 横井純子
- 「就活動画を撮った話」 雨女
- 「アナキズムとの出会い」 高橋力也
- 「無駄の効用」 宮崎博之
- 「統合失調症と金の苦しみ」 原水
- 「まぶしい魚」 中村行寿
- 「算数の教え方」 前岡光明
- 「ピアノが綴る人生」 南風摩耶
- 「迷路からの脱出」 高岡啓次郎
- 「タクシー」 広瀬美月
- 「旅の人」 吉田宏子
- 「愛おしい日々」 ななきざまし
- 「声を上げよう」 下村きよ子

(次ページに続く)

て弾圧している現実がある。過去と現在のどちらの現実も我々がしっかり捉え、問題の本質を考えていくことが同時に重要だろう。

斉藤はな絵氏の「母の電話帳」は、地味な素材だが、九十一歳の老母がパソコンを習い、それで電話帳を作る話である。もどかしく教える立場と、衰えを抱えながらひたすら学ぶその交錯が、温かく老いを見守る愛情の綾をなして柔らかに味のよい手触りを生み出している。老いを見つめる眼と見守る眼に慈しみがある。読後感のいい作品になった。

菊見洋介氏の「翡翠」は変わった題材で、夫が妻から夜逃げをする話である。とんでもない女と結婚をしてしまつて、その暴挙に苦しめられ、やっと命からがら脱出する。今どきこのような逆DVの女性がいるのかと思われるようなひどさだが、救われるのは、たまたま遅れた初詣に見た翡翠のシーンである。この美しい鳥の鮮やかな羽ばたきの色彩に平穏な幸せのありがたさを覚える深い到達が、これまでの逆境と未来を救っている。これが作品をも高めている。好印象を残した。

以下、奨励賞、佳作まで印象に残る好作品は目白押しで、枚挙にいとまがない。あえて触れるとすると、六十八歳でプロのボクシング試合に立った「敗者復活戦」(小笠原敏夫)、ケーキ屋の裏表のペーソスを描いた「店長」(植た。早産から命の神秘のつながりを経験する「ひきこも」もの愛しき軌跡(音楽袖)、記憶喪失の友人からの痛切な手紙「記憶を失った君からもらった異常な愛情」(佐藤真規)、父親の桐タンスへの思いを描いた「桐タンス」(近藤幹夫)も、愛情の模様の深さを残して胸に残った。子を持つ主婦同士の仲間心理をユニークに書いた「ママ友」(朝比奈優)、ボイラーマンの苦闘の仕事リアルに記した「ボイラーメンテ」(aneko)、チベットの遭難事件の周辺を掘り起こした「聖山登るべからず」(森崎律子)なども異色のいい作品だった。

社会批評の領域の「現代の危機」(楽加生)もよく現在の人間社会が直面している問題の本質を突いていたし、ビールのラベルに過ちを印刷した製品の「売る」「売らない」の是非を論じた「EじゃなくてもAじゃないか」(比戸圭)も的確な企業批判になっていた。

佳作の領域にも「文芸思潮」誌面に載せて、読んでほしい作品がいくつもある。宝石箱のような綺麗な煌めきがいばいである。また誌面でその文章を楽しみ味わって、この豊漁を愉しんでいただきたい。人生と世界の多様さ、深さが、また自身の生きる力を呼び起こし、共鳴して、何かを育んでいくてくれることを心から願っている。

入選

- 「修学旅行」 山岡竜弘
- 「諸行輪廻の響きあり」 原 護一
- 「わたしの話」 ちたん
- 「洋服病院の洗濯物は、いつ見ても朗らかだった。」 五六八我楽
- 「青年と海とイワシ」 笠原英一
- 「そのプラスチック、必要ですか？」 花津絵美
- 「祖父の源流をたどる」 堂もマルク
- 「男の隠れ家」 下野昌代
- 「それはキシウローレル号に始まった」 龍野 健
- 「ヨロンと私とモリ・ヨーコ」 秋里洋子
- 「学校祭狂詩曲」 山田吉生

田郁子)、新聞による広報が人間を根本から鼓舞する「新聞見たよ」(石田真一)、認知症が深まる母と字のことを描いた「母の書道」(池田茂夫)も、鮮やかな刻印を残した。また、「動物もの」の、死に瀕した猫を助けて寄り添って生きていく「寄り添い猫と歩む明日」(春木美子)、愛犬の最期が泣かせる「ゴン」(馬込太郎)、都会を出て北海道の牧場で牛たちといっしょの貴重な体験をする「幸い日和」(菅幸世)も、動物の温もりを感じさせる好エッセイだった。



みかみ ひろし  
作家  
1945 山梨県甲府市生れ  
法政大学中退  
1982 「三日芝居」で  
すばる文学賞受賞  
著書 「三日芝居」  
「花供養」  
「月と五人の男」

対話のできる作品

三神弘

作品は作者と読者の間にあって、作者の言葉に導かれ、読者の言葉が誘い出される。書くことと読むことの中に、創造の場がある。エッセイの面白さは、対話ができる作品であるかどうかにかかっている。声の聞こえてくる作品、といいかえてもよい。

最優秀賞の七森侑佳「校庭のエメラルド」からは、敏感な「私」の他者への身構え、距離の取り方、それゆえのあこがれが伝わってくる。「友達というものは本の中にしか存在しない空想の生き物ではないか」と疑い、「私は自分に話しかけ、干渉しようとしてくる同級生たちに怯えきっていた」とも打ち明ける。そして、おのずから全く異質な少女に「惹かれ始め」て

いくのだが、「彼女の読者になっていった」とあり、「多数の物語を内包する一冊の本になっていった」ともいい、複雑な内面をうかがわせ、得難い表現になっている。卒業式が近づいた冬の日、少女は「教室に戻らずに座り込んで土をいじり始め」る。校庭でエメラルドを掘り出そうという少女の「作り話」に付き合うのは、むなししい夢の建設であり、徒労だとも、「私」は承知している。しかし、その夢に熱がこもっていくところが読みどころだ。

ここから、こんどは「私」の成長の物語がはじまっているのだろうか。読者はその物語に思いをめぐらせ、発展させていく。この「私」は世俗へのあこがれをもちつつ、なじみず、決して傷つくことのない、また、エメラルドではない、硬質な、ダイヤモンドの精神を磨いていくのだろうか。こうしたことも読後感であり、対話ができ、読むことの楽しさになっていく。

意識的な作品で、方法があり、構成も表現も洗練されている。

優秀賞の高田智子「仮の宿」は「駅舎の階段下の空洞に」ホームレスとおぼしきテントに「目を疑った」ことからはじまっていく。「真冬のことだ」「犬も吠えだて」と、テントのなかから「寒さのためか、顔のあかぎれた老女」が「野生動物のような鋭い目つき」を向けたという。作者は「その晩は寝付かれなかった。夫は単身赴任中である。」

飼う。そして雀は「回復する体力に比例するように母に懐いていった」という。

作品は娘のまなざしをとおして描かれていく。それゆえ母の実像が細やかに観察され、生き生きとし、間近になる。また、娘との関係のありようも、情愛にも接することができる。対話もできる。どこでも見かける雀だが、「雀の寝顔や水飲みの愛らしさ、たったひとつの存在であるあることの愛おしさ」とある。

娘のもとへある日、母からメールが届く。「ぴい子も羽ばたくという天性を体感しました」と記されていた。庭の木まで高く飛んで、その後、母の手の平に戻ってきたという。「母はとても愛情深い、自然や動物の本能を重んじている人」と、娘は生きる態度を学んでもきた。

やがて雀とも別れなければならぬ日がくる。「迷い込んだ野良猫にやられてしまった。その最期を母は悔やみ、自分を責め続けた」とある。しかし、その後の「でも、猫も悪くないやんか、本能やもん」という言葉が、娘の胸に残る。雀をとおして「いのち」が語られ、雀とともにある母の日々が描かれていく。

素材さに打たれる。素材さを描くのに、しかし、素材な表現では成り立たない。技術が必要だ。このことも読みどころであり、作品の質を高めている。

一軒家には犬一匹、「牡丹雪が落ちてくる」と自己紹介する。ふと出会ってしまったテントの老女の「身の上」を案じたりもする。雪で埋もれ、隠されてしまった老女を「私」は心配し続ける。

町内会の住人達は「ああ、あのね」「どこの誰かは知らないけれど、誰でもみんな知っている」と「顔を見合わせて笑った」という。天気予報が春の嵐を告げた日、「私」は老女に「よかったら、うちに来ませんか」と声をかけ、「自分でも驚いてしまった」とある。わが家の庭に、老女はテントを張り、「私」は彼女と「仮の宿」で一夜を明かす。テントで暮らす老女も奇妙であれば、声をかけた「私」もまた奇妙である。縁もゆかりもない間柄である。老女は翌朝、「庭中の草取りをして帰っていった」という。人助けだとか、やさしさとか、思いやりとかの感情とは、無縁の関係である。そもそも、名前とてない人物だ。ましてや作品には、何の訴えこともない。「私」も「老女」も謎になっていく。

説明も省かれているから、読者の読む領域が広がっている。しだいに、見知らぬ土地の奇譚を読む心地となっている。その昔の雪の日の情景ともなっていく。

優秀賞の丘田ミイ子「母と雀」の母は、怪我を負って飛べなくなった雀を、長い間世話をしてきた。ペランダや庭の安全な場所でエサをやり、雨の日、寒い日には家の中で



つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ  
東海大学文学部卒  
2002「看板屋の恋」で第91回文学界新人賞受賞  
「狼を見る」(文芸思潮)  
「ご眷属様ジャーニー」(三田文学)他「長者屋敷の寝られぬ座敷」(合作)で佐々木喜善賞など 構成作家としても活動中

## 自宅待機のリモート選考会

### 都築隆広

身内からコロナ陽性患者が出て、濃厚接触者になった。自分のPCR検査の結果は陰性だったものの、保健所から二週間の外出禁止を義務づけられ、選考会に出席できなくなりました。

リモートでの参加となった。たまに電話がかかってきて状況を聞いて、意見を発するというのが、大まかなとあった議論の末にこういう結果になったのか、大まかなところしかわからない。最優秀賞を狙える個人的に踏んでいた「仮の宿」が優秀賞におさまり、最優秀賞となったのは「校庭のエメラルド」と「久保木おばあさんの最初で最後の授業」だった。「仮の宿」も「校庭のエメラルド」も

エッセイと呼ぶには物語運びが上手過ぎる印象で、双方とも短編小説を読んでいるかのようだった。創作や脚色ではなく、実話ゆえに虚構っぽさが出たのだと信じた。とはいえ、どちらも作者は稀有な才能の持ち主だった。

一方、「久保木おばあさんの最初で最後の授業」は実話らしさが溢れていて、書かれている内容は素晴らしい。ただ偏屈な私は、この作品が三人称文体、語り手らしき人物を「女教師」と書かれているところが引かかった。三人称で書かれていたら、実話であってもそれはエッセイではなく、小説なのではないか？ 否、大きな嘘さえなければエッセイでええじゃないか？ と果てしない自問自答を繰り返してしまふ。読者様のご判断は如何に？

優秀賞「ウイグル人の証言をきいて」は常連の山田まさ子さんの投稿作。内容も考えさせられるが、やはりこの人の売りは独特の文体と、せつなさのある作風であろう。作家性もあるので、今や一般投稿者として応募してくるのがずるい気もする。

奨励賞「チエーホフの『おじいさん』のように」は長年、編集者を勤めあげた作者だけあって、地に足がついた語り。それでいて「え？ こんなことまで書いちゃっていいの」と思われる記述も交えるあたりが巧みだ。

他に推薦した作品としては奨励賞「コンコルド効果」。

「UFOキャッチャー依存症になる」というテーマに驚かす。佳作「わがシラバスの花ひらく」はいわゆる「すべらない話」系のエッセイ。当選作や優秀賞は難しい水準だけれど、個人的には多くの人に読んで欲しい作品の一つだった。同じく佳作「五万回斬られた男・福本清三への頌歌」は伝説の斬られ役俳優、福本清三との思い出を役者と脚本家経験がある作者が綴ったものだ。日本映画や時代劇の裏話が大好きな私としては、この作品が最優秀賞になっても異論はない程であったが、やはり審査員支持を集められず。興味がない人には刺さらない話題だったのやも知れぬ。

かくして、まさかのリモート出席で、推薦する作品以外の動向はよくわからなかったりもする。新型コロナウイルスは自分で気をつけていても、家族や隣人が気をつけるとは限らないし、何より、己や身内が感染する可能性は考えられても、「すでにもう感染している」という可能性は意外や、考えられないものであった。今や、親しい人間とすら最低限の距離をとって生活すべき時代なのだろう。外出禁止になるまでのくんだりを一投稿者としてエッセイにしたためたい衝動にかられるも、この程度のネタでは奨励賞も難しかろうと筆を取らなかつた。そのくらい今年は豊作であり、これだけ質の良いエッセイが集まったということは、おそらくはステイホームの副産物である。時がたち、コロ

されるし、知られざるUFOキャッチャーの仕組みについて細かく書かれているのも興味深い。依存症というテーマも含めて現代的な題材だと思った。コンコルド効果、別名サンクコストバイアスとは私も最近、知った言葉である。男性が元カノのことを忘れられないのに、女性側がどんなに忘れるのは、男性側が飯を奢ったり、愚痴を聞くなど、付き合う前からコストをかけていることが多いので「コンコルド効果」だ、と、恋愛の話題にも使える単語だったりする。「コンコルド効果」の意味や由来をもう少し本文で詳しく解説していれば、完成度が上がったことだろう。

同じく奨励賞「ママ友」。母親ですら「女性」の一面が見えて信用できない語り手が、「ママ友」という立場ならば周囲の女性とも関係が築けるといった内容。これは現代の女流文学で多いテーマで、マジョリティーとは異なる価値観を持ちながら、派手に抵抗するわけでもなく、なんとか世間との折り合いをつけて生きて行く女性の姿である。こういうテーマは長編の純文学小説よりもエッセイ向きなのだと、改めて思い知らされた。

続いて奨励賞「記憶を失った君からもらった異常な愛情」は自分のことを一方的に好きだといひ続けてきた男との顛末。こちらも「仮の宿」や「校庭のエメラルド」と同じく（作者には失礼ながら）「虚構かのような短編小説風エッセイ」である。こんなことが現実起こり得るのか？

ナ禍がやがてベストやスペイン風邪の時代のように埃にまみれた頃、この「文芸思潮」も過去の空気を知らしめる貴重な一史料となることだろう。



2021.7.31 選考会風景／甲府市「かつぼろ三井」にて